

# 高次脳機能障害者デイケアにおける効果とその有効性

建木健\*<sup>1)</sup>、藤田さより<sup>1)</sup>、鈴木達也<sup>1)</sup>、田中裕美<sup>2)</sup>、秋山尚也<sup>3)</sup>、片桐伯真<sup>4)</sup>、  
滝川八千代<sup>5)</sup>、植田しずえ<sup>5)</sup>、建木良子<sup>6)</sup>、佐野佑未子<sup>6)</sup>

<sup>1)</sup>聖隷クリスティー大学リハビリテーション学部作業療法学科、<sup>2)</sup>朝山病院、  
<sup>3)</sup>浜松市リハビリテーション病院、<sup>4)</sup>聖隷三方原病院、  
<sup>5)</sup>高次脳機能障害サポートネットしずおか、  
<sup>6)</sup>NPO 法人えんしゅう生活支援 net

## 【はじめに】

平成 16 年の厚生労働省の調査によると高次脳機能障害者は全国で 30 万人と推定されており、平成 20 年福岡県実態調査からの推測値では、毎年、全国で 2,884 人の新規発症者がいるとも言われている。また、全国でリハビリテーション等なんらかの支援が必要な高次脳機能障害者は 68,048 人と推測されており決して少ない数とはいえない現状である。この予測値を浜松市の人口に当てはめてみるとおよそ 1900 人が高次脳機能障害であることが推測されることとなる。これらの現状を踏まえ十分なリハビリテーションとその後の就労支援が行われていないのが現状である。

リハビリテーション終了後も、脳の障害のために就労にもつげず家庭で閉じこもってしまう状態の人も少なくない。また、高次脳機能障害についての社会的認知と理解も低く、障がいを持った方が地域や社会で生活していける環境が十分に整っているとは言い難い。

そこで、高次脳機能障害を持った人の「集える場」と「生活技能訓練・就労準備ができる場」を提供し、その有効性を検証すると共に、見た目では分かりにくい高次脳機能障害の理解を地域住民の参加(ボランティアなど)により啓発することを目的とし本研究を実施した。

## 【方法】

-----本研究における高次脳機能デイケアの位置づけ-----

浜松市に在住の高次脳機能障害者（条件①診断を受けている②身体的介護を要しない③就労への意欲がある④20～55 歳⑤原則全てに参加できる）10 名に対して毎月第 1～3 火曜日に高次脳デイケアを実施した。実施内容は午前中に社会生活技能訓練を行い、参加者の社会行動障害に焦点をあて、感情コントロールが行えることを目的に行った。午後は個別プログラムを実施、革細工、陶芸、木工、プラモデル作りなどの作業を通して、参加者自身が問題と感じている記憶や注意などといったことや、作業療法士からの評価によるその他、行動



図 1 高次脳機能デイケアの目的

の計画性やハプニングへの対処などの問題点を明確にした、経過を通して参加者自身が自己評価と他者評価を統合することによって自己の症状に「気づく」ということを目的に実施した。(図 1)

高次脳機能デイケアは医療と福祉の隙間を埋めることによってシームレスなサポートができることを目的としている。(図 2)

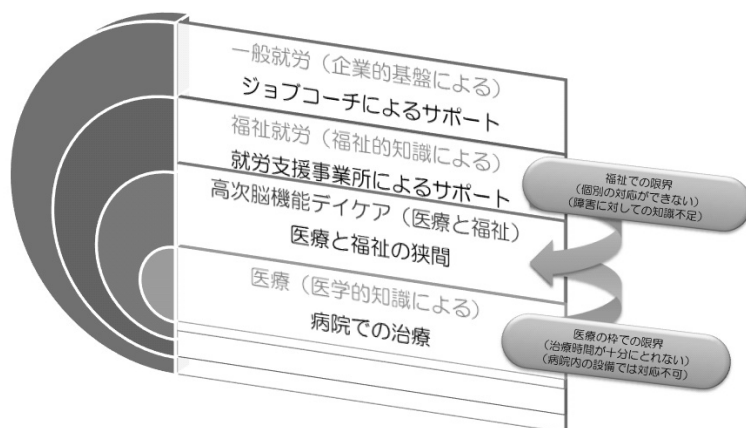


図 2 高次脳機能デイケアの社会的位置づけ

-----アウトカム及び分析方法について-----

高次脳機能デイケアの開始前と終了後に Patient Competency Rating Scale (以下 PCRS)、気分抑鬱スケール (以下 POMS)、General-Efficacy (以下 GSES)、また個別にアンケート及びインタビューを実施した。

-----期間及び参加者人数-----

毎月第 1、2、3 の火曜日 (2010 年 10 月 12 日～2011 年 3 月 15 日) 9:00～15:30 までの計 16 回実施した。高次脳機能障害者の参加者は 10 名 (39.2±12.0 歳) で延べ参加人数 160 名、ボランティア参加者延べ人数は 152 名であった。

-----プログラム内容 (例) -----

9:00	1 日のオリエンテーション 1 分間スピーチ
9:30	集団による社会生活技能訓練 (SST: Social Skill Training)
11:00	SST の振り返り
11:30	昼食 (学食等利用可)
12:45	個別プログラム (陶芸, 革細工, 園芸, 手工芸, 調理, 高次脳機能訓練など)
14:30	個別プログラムの振り返り 全体の振り返り
15:00	終了

## 【結果】

POMS では、T-A (緊張－不安) D (抑うつ－落ち込み)、A-H (怒り－敵意)、V (活気)、F (疲労)、C (混乱) を示す。本研究においては V (活気) の向上、F (疲労) の上昇、C (混乱) の低下など変化が認められた。(図 3) 参加者 10 名の Patient Competency Rating Scale (PCRS) においては、8 割において変化が認められ、設問にある課題項目ができると思うと感じる割合が増加した。(図 4) 当事者と家族からのアンケート調査では、参加開始前における期待値は平均 6.9 ポイント (最高 10 ポイント) であり、参加後における変化値については平均 7.1 ポイント (最高 10 ポイント) であった。また、自由記述では、高次脳機能デイケアに参加することによってポジティブな回答が多い結果となった。(表 1、2)

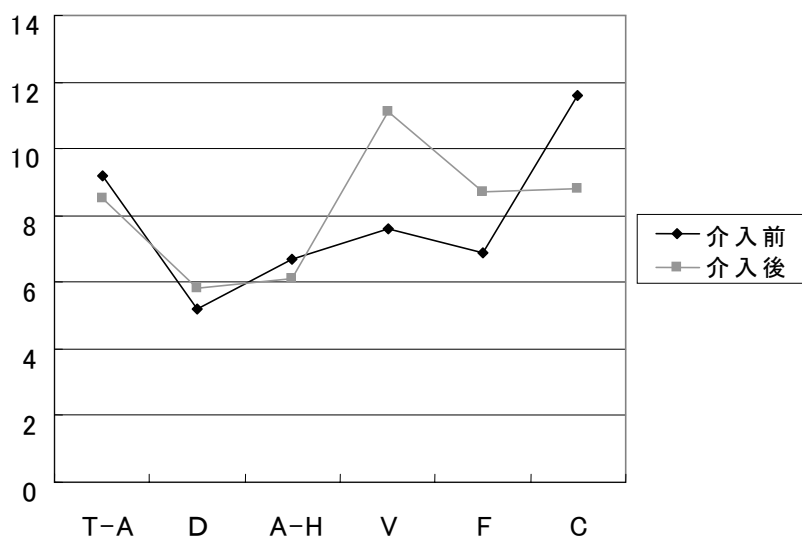


図 3 POMS の結果

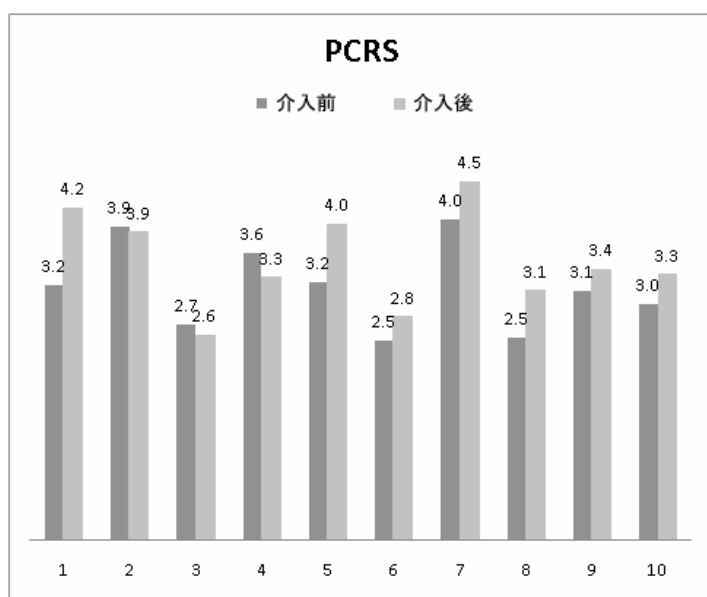


図 4 PCRS の結果

表1 高次脳機能障害者の変化（当事者）

高次脳機能デイケアに参加しての変化（記述回答）	
就労したいという気持ちが継続できるようにになった。集中力が参加する前より続くようになったと思います。集に一回のデイケアがあることで気持ちの向上につながった。	今まではほとんど家にいるだけだったので、会話をしづらかったのですが、少しずつ周りの人との会話ができるようになってきました。
生活スタイルがよい方向に進む様な気がする。	意欲が増した。
1日の過ごし方を工夫するようになった。	目的を持てるようになった。仕事をしたいという意欲がでた（頭と身体がついてこないが）。前向きに生活をしていくことでの持続性がついた。感情はまだ冷めている。
人と会うようになった。	感情を、抑えられる様になって来た。
少しではあるが怒りのコントロールができるようになった。	落ち込んでいた時期があったが、回復することができた。
きそく正しくなった。でも、木曜は履まで寝てしまう。	歩いた。
早く起きて、出かける！という事ができた。	仕事につきたいと、意欲がわいた。
子どもたちとの会話が増えてきたと思います。アルバイトに行った日は早く疲れるので会話するのめんどくさくなり会話しなくなってしまった。	あかるくなった。人と話したいと思った。
前よりは、同じ事を、何度も言わなくなって来た。	他の人に、自分の意見を話せる様になった。
ここにきていることを話したりした。	子どもたちが少し話しかけてくれるようになったと思います（以前より）。
前よりもっと寝る事が多くなった。	外に出かけることに、安心するようになった。
デイケアの事を、親と話してきて、楽しくなった。	ここに来る前は、すこしのことで怒ってしまっていたのが、すこしやわらいていると自分では感じているので、親とのケンカの数がおくりのつかえなどをやっってもらっている。母親の自由時間が減った。
妻との会話が増えた。	

表2 高次脳機能障害者の変化（家族者）

高次脳機能デイケアに参加しての変化（記述回答） 回答者 家族	
会話が楽しくなったようです。	自分の意見が言われた時は、家族に報告してくれました。次回の参加日がたのみみだと書いていた。
参加している間は、自由時間を持つ事が出来ましたが、送迎の時間がありますので、十分とはいえませんでした。（本人が一人でできる様でしたら良いのですが・・・）	送迎に時間がかかる。参加している間は、自分のことができた。
参加前は何事に対しても面倒臭がって続かず無気力でした。参加後は仕事に対する事や夕食の支度でパートナーが増えたり、掃除など家の事に対して大分意欲が出てきた。	仕事に対して意欲が出てきて、資格取得のハンフレットを申し込み、一日も早く仕事に就く為に考える様になった。アルバイト（前職の手伝い）に行く回数が増えた。以前は常にイライラしていておこりやすかったが、子供に対してあまりおこらなくなった。顔色も
IN MY SIDE AS HIS WIFE ITS HARD TO EXPLAIN WHAT IS DIFFERENT BECAUSE EVERYDAY WE SEE EACH BUT I THINK BEING IRRITATED IS LESS THAN	THIS FEW DAYS I HEARD THAT HE WANT OR HE PLANING TO GO BACK TO HIS WORK.
気持ちの安定が見られた。	焦りや、気分の落ち込みが減った。また、気分転換ができるようになった。
言葉の数が増えた。歩行訓練を兼ねた3、40分の散歩を付き添い無く、一人で出かける様になった。携帯電話やビデオ等の操作を自分で出来るようになった。	何でもやろうとする意欲は持続している。笑顔や声を出しての笑いが、多くなった。
高次脳機能デイケアに参加する日は、前日から、とても楽しみにしていて、笑顔でいることが多かった。他の参加されている方（同じ障害を持った方達）との交流も、本人にとって、良い事だったようで、家に帰ってから、色々話をしてくれました。	何かをしようという意欲がとてでもできるようになった気がします。デイケアで作った作品を、家でも見せてくれ、次は何を作ろうかなと、次につながる感情がでるようになってきました。
当日は、早起きして、弁当を作ったりすることができた。次の日は、通院リハビリがあるため、火、水と外出が続き疲れて、木曜日は1日休養日である。	仕事をしたい。
初めの頃は人々になれず、何度も電話があり、どうしよう？身体が変と不安な事でしたが、先生達に相談したらと書いてあげると、何回かすると人々になれて電話の回数がへり、メールだけは、スリリなんだとか、もうおわるよ、とあり、まだ不安がい残っているようです。	皆様と話をしてる様子を帰りの車で全部、事細かに話し、幼稚園児が何をしても、何を食べて終わりまで話しています。そして来週は何をやるのかなーと楽しみにしている様子が有ります。
次々、参加者の事を、話してくれます。	次のステップに期待しています。
家族に対して少しづつ話がしようと思力している様で、今日は誰と遊んで、どんな遊びをしたのか？と聞いたり、子供との話に少しづつ興味が出てきて会話も以前より増えた。	親子（父、子供2人）3人でアニメやバラエティーなどを見て笑ったりして、楽しく過ごす事が増えた。子供の方から父親の近くに座る様になった。
COMARE BEFORE I THINK HE CHANGE OR HE CAN CONTROL BECAUSE I ALWAYS REMIND HIM WHE HE'S TALKING A THING REPEATEDLY.	SINCE HE ATTEND THE CHRISTOPHER DAY CARE, HE CHANGE A LITTLE BIT BEFORE HE DIDN'T WANT TO THINK A THINGS LIKE HE'S SCHEDULE, BECAUSE HE IS IMPATIENCE BUT NOT OBSERVE THAT HE CAN CONTR
一人で買物を楽しんだり、おふる屋さんへ行ったり、友達に会う事が出来ました。でもいつ電話があるか不安でした。参加している間でも不安の中で、その反面すてきな時間がありました。ありがとうございます。毎週のたのし	以前より会話も多く、他とのかわりも積極的にもっていたので、目に見えるような変化はあまり、見られなかった。
言葉がよく出る様になり、問いかけに対する答の返ってくる時間が早くなって来た。	交通機関を利用したの参加だった為、初めは、心配という不安があったが、回を重ねる度に、「1人でもできる」という事が分かり、安心へと変わっていった。
障害を持ってからは、ほとんどリハビリと家の往復だったので、会話の内容もどうしてもかき忘れてしまっていたが、世界が広がったので、往復のバスでの出来事なども会話で出てきたりして、とても良い事だと感じていました。デイでのことを話す。	本人も、気持ちのコントロールの仕方を色々おしえてもらったようで、家でも、感情の変化を察する事ができるようになったように思います。 当事者が元気になってよかった。

## 【結果のまとめ】

----POMS について----

V（活気）の向上、F（疲労）の上昇、C（混乱）の低下など変化が認められた。このことは、今回のプログラムにおいて、高次脳機能障害者の活動性を向上させ、行動を促すものであり、それに伴う疲労感があったのではないかと考えられる。混乱の低下については、集団における目標指向性がはっきりとしており、高次脳機能障害者が目的意識と明確に持てたことと高次脳機能デイケアが安心していられる場としての認識ができたためであると考えられる。

-----Patient Competency Rating Scale (PCRS) について-----

Patient Competency Rating Scale (PCRS) では、各対象者において向上が認められた。今回の参加者の多くはリハビリテーション継続中もしくは終了後に参加した者が多く、社会との接点が少ない者が多かった。そのため設問にある活動ができるかどうかといった項目について、できないと答える者が多かったのではないかと考える。この高次脳機能デイケアをとおして、活動の広がりや認識できたために PCRS 値は向上し、対象者の自尊心はそれに伴って向上したと考えられる。しかし、高次脳機能障害者においては、自己の行動とその結果が伴わないなど自己認知のズレが大きいと言われており、今後の検討においては、実際にその活動ができるのか確認し自己認知のズレを修正する必要性がると考えられる、

-----アンケート結果について-----

当事者対象者については、生活リズムの改善、コミュニケーション能力の向上、家庭での人間関係、感情コントロールについての向上が認められたことを認識している。家族においては、家族とのコミュニケーションが増えたこと、家族（介護者）の自由な時間ができたこと、感情表現や感情コントロールといった点についての向上を意識できたとの回答が多かった。アンケート結果から考えられる点としては、①これまで障がい者に付き添っていた家族が、デイケアの利用によって自由な時間を持てるようになった。②デイケアの参加者は障害が同じであるためピアサポートの要素を含んでおりお互いに理解しようと努めていることが考えられる。

## 【考察】

対象者の参加状況において、多くの参加者は診察などの予定がない限り欠席するものはいなかった。既存の就労移行支援事業所などにおける高次脳機能障害者の利用割合は全体の1割にも満たない。そのため多くの福祉施設では高次脳機能障害に対する知識を十分に持ち合わせているとはいえないため、多くの高次脳機能障害者は継続が困難である。本研究においては、リハビリテーション専門職である作業療法士が実施することによる障害特性を理解した上での対応を行ったために、継続的な参加が促されたと考えられる。この継続性は社会性を築く大きなベースとなる。またプログラムにおいても①社会生活技能訓練により自己の問題解決方法を他者と共有し言語することにより内在化することや②個別プログラムにより自尊心の回復を図るなど個々の能力に合わせた介入をおこなったために短期間であったが個々における変化が認められたと考えられる。

今後の展望として、継続的支援を行い、個々のニーズと能力に合わせた認知リハビリテーション及び就労支援に向けた職業課題の充実と職場研修などを行っていく必要があると考えられる。本研究をとおして、高次脳機能障害者を中心とした支援の場の重要性とその意味を認識することができた。また、就労については、更に病院を退院し新たな出発地点

である医療機関と、家庭内から社会参加へ活動の場を広げるための就労をサポートするジョブコーチとの連携を密にとり、医療機関と就労現場のギャップを埋めるよう機能していくことでシームレスな社会復帰を支援でき、多くの高次脳機能障害者が地域で生活できる場を確保できるのではないかと考える。

#### 学会発表の状況

- ・ 高次脳機能障害者を取り巻く資源に対する意識調査：日本職業リハビリテーション学会 第 39 回大会、2011.8（愛知）
- ・ 第 46 回日本作業療法学会発表予定